

## 感情移入とは何であり、何でないのか

——エディット・シュタインにおける感情移入概念——

中 村 拓 也

エディット・シュタインは、フッサールの指導の下で執筆した博士論文を基に一九一七年に公刊した『感情移入の問題について』(Stein 2008)によって現象学者としての経歴を開始した。シュタインの師であるフッサールの相互主観性理論への取り組みは、その哲学的経歴のほぼ全体にわたり、全体的な統一的理解をそこから汲み取るのは容易ではない。その中で中心的な役割を果たす感情移入についての分析もまた様々な試みを含み複雑で錯綜して容易には見通し難い。このようにフッサールによる感情移入への取り組みは、様々な試みの集積である草稿のなかで展開されており、四〇年近くに及ぶ哲学的経歴全体にわたって講義、草稿、公刊著作のなかで様々な展開されているがゆえに、ともすれば一貫したまとまりを欠いているように見える。それに対して、現象学的感情移入論についての簡潔な論述であるということだけでも、すでにシュタインによる感情移入論は論究されるに値すると言いうことができるだろう(Zahavi 2014: 123-5)。

もつとも、エディット・シュタインの内包する哲学的な意義は、感情移入論に尽きるものでもちろんない<sup>(1)</sup>。例えば、哲学者としてのエディット・シュタインへの等閑視に抗して、マッキンタイアによって英語圏への哲学者とし

てのシュタインの紹介が試みられたのは、それほど昔のことではない (MacIntyre 2007)。しかし、その後、現象学者としてのシュタインへの注目の高まりは、現象学的感情移入論やその独特の共同体論、さらには、そうした問題構制のなかでの独特な哲学的寄与を巡って注目すべき状況を呈していると言えるだろう<sup>2)</sup>。

しかしながら、まずシュタインの哲学的経歴のなかで、初期に当たる現象学者としての哲学的業績が、その重要性に見合う仕方を取り上げられることがなによりも必要である。そこで本論考は、もっぱらシュタインの博士論文『感情移入の問題について』に定位して、とりわけその第二章感情移入作用の本質 (Stein 2008: 11-52) を主題として取り上げる。そこでは、ほかならぬシュタイン自身が、感情移入という意識作用とそれ以外の意識作用とを比較・対照することを通して感情移入という作用の本質を浮き彫りにすることを試みている (Stein 2008: 11-20)。むしろには、シュタイン以外による感情移入とシュタイン自身の感情移入を比較・対照することによって、自身の感情移入概念の独特さを明確にしようと試みている (Stein 2008: 21-52)。ただし、シュタインは、多くの独創的哲学者が、他の独立した哲学者のテキストを論述する際の特徴であるように、感情移入に対する他の哲学者・心理学者の主張を必ずしも中立的で公平な仕方では理解しているわけではない。「他の思想家に対する『批判』は不用意でしばしば不明確である」 (Moran 2004: 304) というモランの評言は、そうした他の哲学者に対する正確な理解をシュタインに求めるのであれば、妥当する。したがって、リップス (Stein 2008: 20-33)、マイノング (Stein 2008: 24)、シェーラー (Stein 2008: 42-51)、ミュンスターベルク (Stein 2008: 52) らについてのシュタインの批判を実り多いものとするためには、シュタインによる読解だけではなく、それぞれの哲学者たちのテキストそのものへの取り組みを必要とするだろう。それはそれで魅力的な課題であり、一つの論文で扱うことはできず、別個の独立した取り組みを必要とするだろう。したがって、本論考は、シュタインによる前者への取り組み (Stein 2008: 11-20)、すなわち、感情移入

とそれ以外の意識作用について分析を綿密に吟味することを通して、シュタインと共に感情移入に特有の性格を明確化すること、すなわち、感情移入とは何であり、何でないのかを明らかにすることを課題とする。

論文全体の構成を予示しておけば以下のとおりである。第一に、シュタインが、現象学的還元の遂行による純粹意識とその相関者としての現象的世界という現象学の枠組みから感情移入の問題に取り組んでいることが明らかにされる。第二に、こうした現象学的枠組みのなかで原初性概念が、体験概念との関連で検討され、それを通して感情移入にとつて重要な自他の差異が明らかにされる。そして、原初性に依拠しながら想起、予期、空想のような他の作用と感情移入との違いが明示される。第三に、原初性、非原初性、共所与性という概念の分析によって異他的意識がどのようなものであるかが照明され、それを踏まえて感情移入の基本的な性格がどのようなものであるかが解明されることになる。

### 一 感情移入論の前提

他者あるいは他者の心の認識可能性を問題とする哲学的論争は、そもそも他者の心が存在するかどうか、どのようにして他者の心を正確に認識することができるのかを正当化することが可能であるのかという問いを主要な争点とする<sup>(3)</sup>。しかしながら、シュタインは、そうした他者の心を巡る認識論的問題を主要な課題として取り組んでいるわけではない。シュタインは、自身が感情移入を論じている脈絡について『感情移入の問題について』の第二章の冒頭でこう論じている<sup>(4)</sup>。

感情移入についてのすべての争いの根底には暗黙の前提がある。すなわち、われわれに異他的な主観とその体験するはたらきとが与えられている、と。この所与性の成立の由来、影響、正当性が扱われている。しかし次なる課題は所与性そのものをそれ自身において考察し、その本質を探究することである。われわれがそれを行う際の態度は、「現象学的還元」の態度である (Stein 2008 : 11)。

このようにシュタインは現象学者として、フッサールと同じように、現象学的還元を遂行した上で、意識に与えられるものの分析へと向かうのである<sup>(5)</sup>。したがって、「われわれの周囲にある全世界、物理的世界も心理物理的世界も、物体も人間の心や動物の心も (探究者自身の心理物理的人格を含めて) 遮断あるいは還元される」 (Stein 2008 : 11)。しかし、現象学的還元の遂行によってもたらされる遮断は、世界の非存在化を意味するのではない。むしろ「純粋な探究の無限の領野がなお残っている」 (Stein 2008 : 11)。

私は、目の前に見ている事物が存在するのかどうかを疑うことができるし、錯覚の可能性があるし、だから私は存在措定を遮断しなければならない。しかし、私が遮断することができないもの、疑いを被らないものは、事物を私が体験するはたらき (mein Erleben) (知覚し、想起し、あるいは他のやり方での把握) とその相関体、その性格全体にかんして維持され続けており、考察の客観とすることができまるまっただき「事物現象」(さまざまな知覚系列あるいは想起系列で同じものとして与えられる客観) である (Stein 2008 : 11)。

現象学的還元によって世界の遮断、すなわち「現実存在措定」 (Stein 2008 : 12) の差し止めが行われたとしても、

私の体験するはたらきとその相関体とが残り続けるのである。「『世界現象』全体は世界指定が破棄された後も残る」(Stein 2008 : 12)。そして「この『現象』が現象学の客観」、すなわち、遮断の後にも残り続ける「純粹な探究の無限の領野」にほかならない。

このようにシュタインが現象学的還元を遂行した上で、感情移入作用についての考察に向かうという点を確認しておくことは、シュタインの感情移入論の特徴を正しく捉えるために極めて重要である。というのは、現象学的還元による遮断を被るものと被ることがないものの区別が、私ないしは自我に適用されることによつて、可疑的な経験的自我と不可疑的な体験する自我とが区別されることになり、さらにこの区別が私以外の自我に関しても適用されることになるからである。そして、まさにこれが現象学における感情移入の独特の特徴を示すことになる。

次のこと、すなわち、私の体験するはたらきが遮断されることはないとは何を意味するのかがなお示されるべきである。自我、しかしかの特性を具えたこの名前と立場のあるこの経験的自我が存在するということは不可疑的ではない。私の過去全体は、夢見られているのかもしれないし、記憶違いであるかもしれないし、だから遮断を被り、ただ現象としてだけ考察の対象であり続けるにすぎないが、しかし「私」、世界と自分の人格とを現象として考察している体験する主観、「私」は体験するはたらきにあり、体験するはたらきにしかなく体験するはたらきそのものと同様に疑うことができず削除することができない。(Stein 2008 : 12)。

「私の体験するはたらきは遮断されることはない」という言明のもつ意味を吟味することを通して、経験的自我、すなわち、記憶などの具体的な内容を伴った自我の可疑性が指摘される一方で、私と体験するはたらきの不可分性、

換言すれば、私によって一人称的に生き抜かれているという仕方ではしか体験はありえないことが指摘され、さらにその不可疑性と削除不可能性が確認されることになる。こうして自我は、経験的自我と体験する自我とに区別される。両者は、それぞれの性格特徴に応じて区別される、すなわち、具体的な内容を伴う自我の可疑性と、私が一人称的に生き抜いている体験するはたらき、すなわち、体験する自我の不可疑性・削除不可能性によって区別されるのである<sup>(6)</sup>。そして、先の箇所はこう続く。「今やこの考察の仕方をわれわれの事例に適用することが重要である」(Stein 2008: 12)。「この『われわれの事例』とは、シュタインが『感情移入の問題について』第二章の冒頭に主題として掲げた「異地的な主観とその体験するはたらき」(Stein 2008: 11)にほかならない。

私が生きている世界は物理的物体の世界であるだけではなく、そのなかには私の他にも体験する主観が存在し、私はこの体験するはたらきについて知っている。この知は疑うことができない知ではなく、われわれはまさにここでさまざまな錯覚を被るので、ときおりこの領域一般での認識の可能性に絶望する傾向がある——しかし、異地的な心の生という現象は現にあり疑うことができないし、今やこれをいくらか詳しく考察したいのである (Stein 2008 12-3)。

私の体験するはたらきではなく、私がこれまでに体験してきたこと、私のこれまでの経験内容は可疑的であり、私の経験内容であるとはいえず、それについての認識は誤る可能性に対して開かれている。このように自分の過去についてでさえ確実な認識に至ることができない、すなわち、自分の過去についての認識は可謬的である。それと照応する仕方では異地的な心の生が体験していることについての認識もやはり可謬的であり、「疑うことができない知ではな

く、それどころかそうした私とは異なる主観についての認識の可能性は、その捉え難さのゆえに、絶望的であるとさえ言われている。しかし、その一方で「異他的な心の生という現象は現にあり疑うことができない」。これは先に挙げた『感情移入の問題について』の第二章冒頭の「われわれに異他的な主観とその体験するはたらきとが与えられている」という言明に対応している。

なるほど、シユタインによれば、異他的な心の生、すなわち、異他的な体験する主観と異他的な主観の体験するはたらきは、不可疑的に与えられている。しかし、そうであるとすれば、同じものが一方では可疑的であり、他方では不可疑的であるということになり、そこに矛盾が生じているように思える。しかし、一見すると矛盾するように思えるシユタインのこの言明は、私の経験的自我と体験する自我という区別に照らし合わせ、その区別を異他的な主観に適用することによって理解できるようになる。異他的主観の体験するはたらきは不可疑的であり、同じ異他的主観が体験するもの、すなわち、その体験内実は可疑的である、と。

かくして経験世界のなかで物理的事物から区別される心理物理的個体が獲得される。心理物理的個体は、体験するはたらき、すなわち、物理的事物と区別される「感覚する身体」であり「感覚し、思考し、感じ、意欲する自我」にほかならない。したがって、その体験するはたらきとそれに属する自我は、経験世界のなかの物理的事物のような単なる存在者ではなく、私が世界を生きているのと同じく、自らの相関者としての現象的世界を私と共に生きているのである。

われわれは、経験世界のなかで眼前にある全く具体的な現象から、はっきりと物理的事物から区別されている心理物理的個体という現象から出発することができるだろう。心理物理的個体は物理的物体として与えられるので

はなく、自我が帰属する感覚する身体として、感覚し、思考し、感じ、意欲する自我として与えられる。その身体は私の現象的世界に組み入れられているだけではなく、それ自体そうした現象的世界の方向定位の中心であり、現象的世界に向かい合っており、私と相互に交流する (Stein 2008 : 13)。

では、いったいどのようにしてこの「心理物理的個体」、「自我が帰属する感覚する身体」、「現象的世界の方向定位の中心」、「私と相互に交流する」自我という現象が私に与えられるのだろうか。感情移入によってというのが、シュタインの回答である。したがって、感情移入とは何であるのかという問いにこの段階で答えておくならば、「異他的な心の生という現象」、すなわち「異他的な主観とその体験するはたらき」を私に与える作用、これこそが感情移入にほかならない。

異他的な体験するはたらきのこうした所与性のすべては、異他的な体験するはたらきが把握され、今やその語に付着しているすべての歴史的伝統を無視して、われわれが感情移入と呼ぼうとする作用の根本様態を遡示している (Stein 2008 : 13-4)。

こうして現象学者シュタインの感情移入論は、現象学の研究の道行きに忠実に「ジグザグ」(Husserl 1984 : 22)に進むことになる。すなわち、この場合には、「異他的な体験するはたらき」という「所与性」から「異他的な体験するはたらき」を与える作用である感情移入の分析へと向かうことになるのである。



## 二 感情移入とは何でないか

シュタインは、感情移入の基本的な性格を明らかにした上で、さらに他の作用と照合することによってその明確化に向かう。「これ〔感情移入という作用〕は、純粹意識（先述の還元の後行後のわれわれの考察の領野）の他の作用と照らし合わせるならば、最もよくその特色が際立つことになる」（Stein 2008 : 14）。したがって、ここでの課題は、感情移入が何でないかを明らかにすることによって、感情移入特有の性格を明確にすることである。

その際に重要となるのは、原初性 (Originalität) という概念である (Stein 2008 : 15-6)。というのは、原初性をもつかどうかを照らして感情移入という純粹意識の作用は、純粹意識の他の作用から区別されることになるからである。シュタインは、さしあたり外的知覚を例にとつて原初性を説明している (Stein 2008 : 14-5)。それによれば、外的知覚は、対象ないし客観を「私に生々しく与える作用」であり、外的知覚を通して与えられる対象の側面が「生々しい」あるいは「原初的」であるとされる。

外的知覚とは、空間時間的、事物的存在と生起とを、私の前にここに今それ自体現実に存在し、あれこれの側面を向けながら、私に生々しく与える作用を表す名称である。その際、この私の方を向いている側面は、特殊な意味で、共に知覚されてはいるがこちらを向いていない側面と比較して、生々しくあるいは原初的にそこにある

(Stein 2008 : 14)。

なるほど外的知覚は空間的対象を一挙に全面的に与えるわけではなく、ある一側面を原初的に与えるにすぎず、私の方に向いていない側面はともに知覚されてはいるが、原初的には与えられていない、すなわち、非原初的にしか与えられていない。しかし、この非原初的側面は、知覚がさらに進んでいくにつれて、例えば、空間的事物を回転させたり、その周りを回ったりすることで新たな側面が私の方に向くことによって、原初的に与えられることになる。

それに対して、痛みのような心的なものについては外的知覚をもつことができない。というのは、痛みのような心的なものは、空間的対象の現在見えていない側面のように知覚の進行と共に原初的に与えられることはないからである。「痛そうに動いた表情——いつそう正確に言えば、私が感情移入しながら痛そうに動いた表情として統握する顔の変化——を、私は、望みだけの側面から考察することができるが、原理的にはけっして、その代わりに痛みそのものが原初的に与えられている『方向定位』にいたることはなく」(Stein 2008: 145)。感情移入は、外的知覚とは異なり、痛みが与えられている「方向定位」、換言すれば、痛みを感じている心的なものを原初的に与えることはない。「痛そうに動いた表情」のような「原初的に与えられた表現は——フッサールが言うのをつねにしているように——『共に与えられるもの』自体として、今存在する現実として現にある心的なものを『共現前する』」(Stein 2008: 15)。

したがって、感情移入は外的知覚ではない。「体験自体の把握としての感情移入は外的知覚がもつ性格をもたない」(Stein 2008: 15)。しかしながら、このことによって、感情移入が原初的なものであるという性格を欠くとまでは言うことができない(Stein 2008: 15)。なぜそのように言うことができるのか。それを明らかにするために、シユタインは原初性をいつそう詳細に分析しようとする。「感情移入は自分の体験作用の原初性を所有するのか、と。この問いの答えに取りかかることになる前に、原初性のもつ意味をさらに詳細に区別する必要がある」(Stein 2008: 15)。

すべての自分固有の現在の体験 (Erlbnisse) そのものは原初的である——なにが体験するはたらき (Erlben) そのものよりも原初的であることなどあるだろうか。しかし、すべての体験が原初的に与えるのではなく、その「体験の」内実に応じて原初的なのである。想起、予期、空想は客観を生々しく現在の面前にしておらず、それ「客観」をただ準現在化するにすぎない。そして準現在化性格はこうした作用の内在的本質契機であり、客観から獲得された規定ではない。体験流のなかで今産出された諸々の世界としてこうした諸々の体験は原初的である。しかし、それら「諸々の体験」が構成するものは根源的に産出されたものではなく、再び産出されたもの、準現在化されたものであり、したがって非原初的である (Stein 2008 : 15-6)。

シユタインは、ここに至るまで一貫して体験するはたらき (Erlben) と諸々の体験 (Erlbnisse) とを事象に即して周到に区別して用いている。原初性を有するのは「自分固有の現在の体験そのもの」であるとされる。そして諸々の体験すべてが原初的であるわけではなく、そうした諸々の体験のなかで「自分固有」と「現在の」という二つの限を被った体験である体験するはたらきこそが原初的なものにほかならないのである。そうであるがゆえにこそ体験するはたらきは、自分固有の現在の体験というその内実に応じて、原初的に与えられている体験でありかつ原初的に与える体験でもある。これは私と体験するはたらきとの不可分性と不可疑性とも結びついている。それゆえに、自分固有の現在の体験のもつ原初性は、一人称的に生き抜かれていることと呼ぶことができるのである<sup>(7)</sup>。

かくして原初性の厳密な意味が明確にされる。それを踏まえて、シユタインは「感情移入の作用と自己体験されたものが非原初的に与えられている作用との広範な類比」(Stein 2008 : 16) を通じた感情移入の明確化に取り組むのである。この「自己体験されたものが非原初的に与えられている作用」とは、「客観を生々しく現在の面前に」して

おらず、「準現在化するにすぎない」作用であるとされる想起、予期、空想にほかならない。したがって、あらかじめ述べておけば、感情移入は想起、予期、空想ではない。

シュタインはまず想起を取り上げる。「喜びの想起は準現在化するはたらきという今遂行される作用として原初的であるが、その内実——喜び——は非原初的である」(Stein 2008: 16)。想起の内実が非原初的であるとは「原初的ではなく、生々しく現にあるのではなく、かつて生き生きとしていたものとしてある」(Stein 2008: 16) ということである。「想起は措定性格をもち、想起されたものは存在性格をもち」(Stein 2008: 16)。そうすると想起によって以下の事態が生じる。想起する自我は、想起による準現在化によって過ぎ去った体験内実を志向的客観として捉える。それと関連して、過ぎ去った体験内実には、その過ぎ去った体験内実の主観である過去の自我がある。こうした想起は次のような事態を発現させる。

そのとき今の自我と当時の自我とが主観と客観として対立しているのであり、両者の合致は生じないのである。もっとも、自同性 (Selbigkeit) の意識はあるのだが。しかし、この自同性の意識は明確な同一化ではないし、そのうえ原初的な想起する自我と非原初的な想起される自我との間には区別がある (Stein 2008: 16)。

なるほど、想起によって捉えられる体験、いつそう正確に言えば、準現在化される体験内実は、自分固有の体験内実、すなわち、私の体験ではある。しかしながら、それは私の体験ではあっても、私の現在の体験ではない。そうであるがゆえに、原初的に与えられておらず、非原初的な体験なのである。過ぎ去った体験内実を想起している自我と過ぎ去った体験内実の自我は、同じ私であるがゆえに自同性をもつが、この自同性は、両者の時間的隔たりによって

区別されるのであり、したがって、両者が「明確な同一化」に至ることはない。換言すれば、両者の間には区別が残り続ける。

予期については、過去の想起に対して未来の予期という仕方での逆転が生じるにすぎない。したがって「予期の事例は、特に取り上げる必要がほとんどないほどに並行的である」(Stein 2008: 17)。それゆえ、シュタインは予期をほとんど素通りして、空想の分析に向かう。

私は、空想体験のなかで生きながら、空想する自我と空想される自我の間の、体験の連続性によって埋められる時間的隔たりを見出さない。……だがここでも区分をすることができる。すなわち、空想世界を創り出す自我は原初的であり、それ〔空想世界〕のなかで生きる自我は非原初的である (Stein 2008: 18)。

想起する自我と想起される自我の間には体験の連続性による自同性を保ちながら、なお同一化を拒む時間的隔たりがあったのに対して、空想の場合には、そうした時間的隔たりはない。しかし、だからといって空想する自我と空想のなかで生きる自我を同一化することはできない。というのは、両者はやはり現在を巡る原初性と非原初性によって区別されるからである。空想された体験は、想起された体験のように現実の体験の準現在化ではない。空想された体験の現在は、客観的時間のなかに占めるべき位置をもたない疑似時間の中かの疑似的現在にすぎないからである。

空想された体験は、想起された体験に対して、それが現実の体験の準現在化として与えられず、現在の体験の非原初的な形式として与えられるということによって性格づけられている。その際、「現在の」は客観的時間の今

を指し示しておらず、この事例では空想時間の「中立的」今のなかでだけ客観化することができる体験された時間を指し示しているのである (Stein 2008 : 18)。

こうして純粹意識の諸作用、すなわち、想起、予期、空想がそれぞれどのようなものであるのが原初性と非原初性に基づいて性格づけられた。シュタインの目論見は、現象学的還元の遂行後の純粹意識の諸作用の検討を通して、すなわち、感情移入が何でないのかを示すことを通して、翻って感情移入特有の性格の明確化を図ることであった。それでは、感情移入とはいったい何なのか。これが明らかにされねばならない。

### 三 感情移入とは何か

シュタインは、感情移入という作用を通して与えられるものとしての「異他的な主観とその体験するはたらき」から出発して、感情移入とは異なる純粹意識の諸作用、すなわち、想起、予期、空想の検討を介して、ついに感情移入の明確化という課題に取り組むことになる。

したがって、今や感情移入そのものについてである。ここでもまた現在の体験として原初的であるが、それ〔感情移入の内実〕を純粹にそれ自体で捉え、原初的に与えられるものと共に「共所与性」として捉えるのではないならば、その内実に応じて非原初的である作用が問題である (Stein 2008 : 18-9)⑧。

一見すると難解な感情移入についてのこの論述は、これまでに取り上げてきた内容に照らすことよって理解することができるようになる。感情移入は現在の体験、いつそう正確に言えば、私の現在の体験としては原初的である。では、感情移入作用の内実とはいったい何か。これもすでに明らかである。「異他的な主観とその体験するはたらき」にはかならない。感情移入は、すでに確認したように、外的知覚が外的事物の見えていない側面を、知覚が進行することよっていずれば原初的に与えることができる非原初的なもの、原理的には原初的に与えられることが可能な非原初の所与性として、その内実、すなわち、「異他的な主観とその体験するはたらき」を捉えることはできない。

「異他的な主観とその体験するはたらき」は、共所与性として、原初的に与えられるもの、例えば、異なる主観の身体が共現前するもの、すなわち、けっして私にとつて原初性として与えられることのない特異な所与性である共所与性として与えられるにすぎない。ここで共所与性と呼ばれているものは、知覚の場合のように、原理的には原初的に与えられる可能性があるが、現在は非原初的に与えられている空間的事物の今見えていない側面とは異なり、厳格な意味では原初的に与えられることがないが、異他的主観にとつて原初的に与えられており、そうであるからこそやはり異他的主観が共現前するという特異な性格をもつものとして与えられる現象なのである。しかし、感情移入は、その内実である「異他的な体験するはたらき」が、最も厳密な意味で私にとつて原初的に与えられる私の体験するはたらきではないがゆえに、その内実に照らせば「非原初的」である。換言すれば、純粹に、つまり、共所与性というその特異な与えられ方を度外視するならば、「異他的な主観とその体験するはたらき」というその内実が、あくまで共所与性をもつにすぎず、厳格には原初的ではないという意味での非原初的という性格を感情移入に帰するのである。

感情移入される体験の主観——そして、それは自分固有の体験の想起、予期、空想に対して基本的に新しいものである——は感情移入を遂行するのと同じ主観ではなく、別の主観であり、両者は分離しており、そこ〔自分の体験〕でのように自同性の意識によって体験の連続性は結びつけられてはいない。(Stein 2008: 20)。

私、すなわち、感情移入を遂行する主観によってこの感情移入される体験の主観は、これまで「異他的な主観とその体験するはたらき」と呼ばれてきたものである。感情移入という作用は、ここまで感情移入と比較対照されてきた想起、予期、空想などの作用とは、それらが総じて「自分固有の体験」をそれぞれの仕方と与える作用であったという点で異なる。それらの場合には、あくまで「自分固有の体験」を与える作用であったがゆえに、それらの作用を遂行する主観とそれらの作用を介して与えられる体験とが「自同性の意識」による連続性によって結び付けられている。しかし、感情移入が与えるのは「感情移入される体験の主観」、すなわち、感情移入を遂行するのは「別の主観」であり、「両者は分離しており」、それゆえに両者の間に自同性の意識は成立していない。翻つて言えば、感情移入が遂行されても自他の差異は維持されつねに意識され続けているのである。シュタインは、私が感情移入すること、を他の主観の喜びを例にして説明する。

そして、私は、他者のかの喜びのなかで生きることによって、原初的な喜びを感じはせず、それ〔他者の喜び〕は私の自我から生き生きと湧き出るのではなく、想起された喜びのような昔生き生きとしていたという性格もまたもたず、なおいつそうわずかであり、それは現実の生なしに単に空想された喜びにすぎないが、かの他の主観が原初性をもつのであり、私はこの原初性を体験しないけれども、それ〔他の主観〕から湧き出る喜びは原初的



な喜びである。もつとも、私はそれを原初的な喜びとして体験しはしないけれども (Stein 2008 : 20)。

感情移入する私の主観は、なるほど他の主観が原初性をもつことを意識しているが、しかし、そうであるがゆえに、他の主観の原初的体験が自分固有の原初的体験でないこともまた意識している。それは、それは感情移入が向かう他の主観という現象のもつの特異さについての意識であるともいえる。感情移入によって私に与えられる非原初的なものは、単に非原初的なものではなく、他の主観にとつての原初的なものである。

私の非原初的な体験するはたらきのなかで私は、いわば私によって体験されていないが現にあり、私の非原初的な体験するはたらきのなかで告示される原初的なものによって導かれているのを感じる。こうして感情移入のなにはある種の独特な経験する作用 (*eine Art erfahrender Akte sui generis*) がある (Stein 2008 : 20)。

感情移入は、他の主観の原初性、他の主観にとつて原初的であるがゆえに私にとつて原初的に与えられることがない非原初的なものを共所与性として、すなわち、「異なる主観とその体験するはたらき」の全体にはかならない異他の意識として私に与える<sup>(9)</sup>。しかしまた、感情移入は、作用、想起、予期、空想といった他の作用とは区別され、それらに還元することができない。したがって、感情移入とは、自分固有の体験を与える諸々の作用とは異なり、他の主観の原初性を非原初的に共所与性として私に与える「ある種の独特な経験する作用」なのである。そうして、シュタインは感情移入をこう定式化している。「感情移入は、異他的意識一般についての経験」(Stein 2008 : 20) である<sup>(10)</sup>。

## むすび

シュタインは、現象学として、師であるフッサールに忠実に現象学的還元の遂行によってありとあらゆるものを遮断・還元し、純粹意識にとつての現象として捉えなおすことから出発する。現象学的還元によって、私の意識とその相関者としての現象的世界とが獲得される。そしてその現象的世界には、私と同じように現象的世界の方向定位の中心として異他的な主観が与えられている。シュタインの感情移入という概念は、こうした現象学的枠組みのなかで展開されている。

シュタインによる感情移入論にとつて、現象学的枠組みのなかで原初性という概念が体験するはたらきと体験との区別と相俟つて重要な役割を演じている。自分固有と現在のという二つの規定を具えた体験が体験するはたらきであり、したがって、自分固有の現在の体験が原初性をもつことが明らかにされる。そうして、それに依拠して自他の差異を維持し続けるシュタインの感情移入概念の特徴が際立たされる。また原初性概念を顧慮しながらの想起、予期、空想のような他の作用との比較を通して、感情移入の明確化が図られる。

感情移入は、異他的な主観とその体験するはたらきとを与える作用である。したがって、問題はそれらが与えられる仕方ということになる。そして、その際、再びまた原初性が前景に現れる。原理的に原初的に与えられることのない異他的主観はどのようにして私に与えられるのが問題となる。そうしてシュタインが感情移入について明らかにしたことは、異他的主観にとつて原初的に与えられるものは、感情移入を遂行する主観にとつて原初的に与えられるはしないが、しかし単に非原初的に与えられるのではなく、共現前性として捉えられるということである。感情移

入によって私に与えられるものは、原初性を欠くという意味では非原初的であるが、単に非原初的であるだけではなく、他の主観にとって原初的なものであり、その特異な在り方のゆえに、共所与性として与えられる、と。したがって、感情移入は他の作用と区別される「ある種の独特な経験する作用」であることが明らかにされるのである。

本論考は、シュタインの感情移入概念の基本的な性格の明確化にまでは辿り着くことができた。しかし、シュタインが展開する感情移入論全体に照らせば、その基本的な性格としての「異他的意識一般についての経験」という性格づけのもつ意味を明らかにしたとはいえず、ここでの考察はなお導入的な説明に留まる。シュタインは、本論考が主題とした『感情移入の問題について』の第二章では、フツサールの議論に忠実な展開を目指していた。しかしながら、さらに続く第三章と第四章で展開する心理物理的個体や精神的な人格についての分析こそが、シュタイン自身の本来の目的であり (Moran 2004: 303-4)、それらを踏まえた全体の分析によってはじめて、「異他的意識一般についての経験」としてのシュタインの感情移入概念の適切な理解とその理論的可能性の解明が可能となる。本論考は、そうしたさらなる課題に取り組むための最初の階梯にすぎない。そして、残された課題への取り組みは、すでに近年の多くの研究が取り組んでいる現代の共感論という大きな問題構制に対する現象学の寄与可能性を照明することにほかららないのである。

註

引用文中の「」は引用者による補足である。また、原文の強調は、引用によって脈絡から切り離されていることに鑑みてすべて無視されている。

- (1) 哲学者としてのエディット・シュタインについては、カルカーニョによる優れた概説書がある (Calagno 2014)。そこでは、

- 現象学者シュタインの哲学的意義と共に現代的関心との関連づけが手際よく行われている。
- (2) シュタインを主題とする論文集が近年陸續と公刊されている。例えば、以下を挙げることができる。Beckmann-Zoller and Gerl-Falkovitz 2006; Szano and Moran 2015; Speer and Regh 2016; Magri and Moran 2017; Reyes-García and Calcagno 2020. 例えは、そうした他者の心を巡る議論については以下を参照。Avramides 2001; Avramides and Parrott 2019.
- (3) フッサールの指導の下ゲッティンゲンで執筆された博士論文は、第一章に歴史的な考察を含んでいた。しかし、一九一七年に公刊された『感情移入の問題について』は、その基になった博士論文のうちの第二章、第三章、第四章からなっているしたがって、現行の全集版も前書きに続く第一章を欠き、第二章から始まっている。
- (4) シュタインは、前書きで、『感情移入の問題について』の基になる博士論文の執筆の際に、フッサールの『イデー』の第二部のための草稿（現在のフッサール全集第四巻である『イデーII』）を閲覧したことを報告している。フッサールは、そこで感情移入を主題の一つとして取り上げられている（Husserl 1952: 162-72）。その上で、フッサールとの近さについてこう語っている。「私の研究の問題設定と方法は、まったくもってフッサール教授から受け取った示唆から生じてきたのである」（Stein 2008: Vf.）。
- (5) こうしたシュタインの自我論の特徴については、以下を参照。Zahavi 2014: 78-87. そのうちでは体験する自我、すなわち、純粹自我が具体的内容、つまり深みを欠くことが「純粹であるが貧困」（Zahavi 2014: 83）であるとされる。
- (6) この『Erlieben』と『Erlebnisse』の区別は、フッサールによって内的時間意識の分析を通して獲得されて以来、現象学的思考にとつて極めて重要な意義をもち、それは感情移入についての明確な理解のためにも必要である。シュタインもまたこの両者の区別をフッサールに忠実に継承している。それは、シュタインが、フッサールの時間講義と時間意識についての分析を實質的に編集したという事実を思い起させる（Husserl 1966: 5）。さらにザハヴィは「意識の遍在的一人称性」と「変化する体験の複数性」として捉えなおしている（Zahavi 2014: 65-66）。
- (7) 注目すべきなのは、この箇所がこう続いていることである。「そして、この内実はいふたびまた、想起、予期、空想のようないろいろな遂行形式で立ち現れることがある体験である」（Stein 2008: 19）。「異他的な主観とその体験するはたらき」は、様々な作用の内実でありえるのである。なるほど「異他的な主観とその体験するはたらき」を与えうる基礎的な作用は、感情移入にはかならない。しかし、そのことは、内実としての「異他的な主観とその体験するはたらき」が想起、予期、空想などといった様々な作用の内実であることを妨げない。「異他的な主観とその体験するはたらき」は感情移入を基礎とす

る多層的な作用によっていっそう豊かに与えられることになるのである。これが「異他的意識一般についての経験」(Stein 2008: 20)としての感情移入、多層的作用の複合としての感情移入なのである。しかし、この問題に取り組むことは、本論考の範囲を超えてしまうことになる。

- (9) シュタインは他の主観の原初性が原初的に与えられないという事態について、神にとつてさえ空間的事物が現出を通してパスベクティヴ的のしか与えられないという『イデーニー』でのフッサールの言明を思い出させる仕方である(Husserl 1976: 351)。「神にとつても人間の体験は、自分固有の体験になることはなく、同じ種類の所与性を受け取ることとなる」(Stein 2008: 20)と述べている。

- (10) 明らかに「*レ*」で注意すべきなのは、シュタインが、感情移入を、他の主観の原初性についての「体験」ではなく「異他的意識一般についての経験」あるいは「独特のある種の経験する作用」と呼び、体験と経験を慎重に区別していることである。

## 文献

- Avramides, A. (2001). *Other Minds*, (New York: Routledge)
- Avramides, A. and Parrott, M. (eds.) (2019). *Knowing Other Minds*, (Oxford: Oxford University Press)
- Beckmann-Zöllner, B. and Gerl-Falkovitz, H. (eds.) (2006). *Die „unbekannte“ Edith Stein: Phänomenologie und Sozialphilosophie*, (Frankfurt am Main: P. Lang)
- Calcagno, A. (2007). *The Philosophy of Edith Stein* (Pennsylvania: Duquesne University Press)
- Calcagno, A. (2014). *Lived Experience from the Inside out: Social and Political Philosophy in Edith Stein* (Pennsylvania: Duquesne University Press)
- Calcagno, A., (ed) (2015). *Edith Stein: Women, Social-Political Philosophy, Theology, Metaphysics and Public History: New Approaches and Applications* (Dordrecht: Springer)
- Calcagno, A. (2018). Edith Stein's Challenge to Sense-making: The Role of the Lived Body, Psyche, and the Spirit. In Zahavi, D. (ed) *The Oxford Handbook of the History of Phenomenology* (Oxford: Oxford University Press)
- Dullstein, M. (2013). Direct Perception and Simulation: Stein's Account of Empathy, In: *Review of Philosophy and Psychology*, 4, 333-

350

- Husserl, E. (1952). *Husserliana IV : Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch : Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*. Hrsg. v. Biemel, M. (Dordrecht : Nijhoff)
- Husserl, E. (1966). *Husserliana X : Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)*, Hrsg. v. Boehm, R. (Dordrecht : Nijhoff)
- Husserl, E. (1976). *Husserliana III : Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Bd. I, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, Hrsg. v. Schuhmann, K. (Dordrecht : Nijhoff)
- Husserl, E. (1984). *Husserliana XIX : Logische Untersuchungen, Bd. II, Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Hrsg. v. Panzer, U. (Dordrecht : Nijhoff)
- Jardin, J. and Szanto, Th. (2017). Empathy in the Phenomenological Tradition. In Maiborn, H. L. (ed) *The Routledge Handbook of Philosophy of Empathy* (New York : Routledge) 86-97
- Magri, E. and Moran, D. (eds) (2017). *Empathy, Sociality, and Personhood : Essays on Edith Stein's Phenomenological Investigations* (Dordrecht : Springer)
- MacIntyre, A. (2005). *Edith Stein : A Philosophical Prologue 1913-1922* (Mary Land : Rowman & Littlefield)
- Moran, D. (2004). The Problem of Empathy : Lipps, Scheler, Husserl and Stein. In Thomas A. F. Kelly, Th. A. F. and Rosemann, P. F. (eds) *Amor Amicitiae = On the Love that is Friendship : Essays in Medieval Thought and beyond in Honor of the Rev. Professor James McEvoy* (Leuven : Peeters) 269-312
- Reyes-García E. and Calcagno, A. (eds) (2020). *Edith Stein's An Investigation Concerning the State : Society, Nationhood, Ethics* (Dordrecht : Springer)
- Sawicki, M. (1997). *Body, Text, and Science : The Literacy of Investigative Practices and the Phenomenology of Edith Stein* (Dordrecht : Kluwer Academic Publishers)
- Schulz, P. (1994). *Edith Steins Theorie der Person : Von der Bewusstseinsphilosophie zur Geistesmetaphysik* (Freiburg : Alber)
- Speer, A. and Regh, S. (eds.) (2016). „Alles Wesentliche lässt sich nicht schreiben“ : Leben und Denken Edith Steins im Spiegel ihres Gesamtwerkes (Freiburg : Herder)

- Stein, E. (2008). *Zum Problem der Einfühlung* (Freiburg : Herder)
- Svenaeus, F. (2016). The Phenomenology of Empathy : A Steinian Emotional Account. In : *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 15, 227-245
- Svenaeus, F. (2018). Edith Stein's Phenomenology of Sensual and Emotional Empathy. In : *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 17, 741-760.
- Szanto, Th. and Moran, D (eds) (2015). *Empathy and Collective Intentionality: The Social Philosophy of Edith Stein*, Special Issue : *Human Studies*, 38 (4)
- Varga, P. A. (2016). Edith Stein als Assistentin von Edmund Husserl : Versuch einer Bilanz im Spiegel von Husserls Verhältnis zu seinen Assistenten mit einem unveröffentlichten Brief Edmund Husserls über Edith Stein im Anhang. In Speer, A. and Regh, S. (eds) „*Alles Wesentliche lässt sich nicht schreiben*“ : *Leben und Denken Edith Steins im Spiegel ihres Gesamtwerkes* (Freiburg : Herder)
- Zahavi, D. (2010). Empathy, Embodiment and Interpersonal Understanding : From Lipps to Schutz. In : *Inquiry*, 53 (3) : 285-306.
- Zahavi, D. (2011). Empathy and Direct Social Perception : A Phenomenological Proposal. In : *Review of Philosophy and Psychology*, 2, 541-558
- Zahavi, D. (2014). *Self and Other. Exploring Subjectivity, Empathy, and Shame* (Oxford : Oxford University Press)